【Zoom】一遍上人の言葉を読む　　令和２年８月 15 日（土）

◎一遍上人［1239 － 1289］
・伊予の国生れ（愛媛県）。
・10 歳の時、母親が亡くなり、父親の勧めで出家。
・25 歳の時、父親が亡くなり、還俗して伊予に戻るが、一族の争いに。
・1271 年、32 歳で再び出家。
・1274 年、遊行始める。各地を転々として修行。
　四天王寺、高野山を経て、熊野に登り、熊野本宮で信心決定。
・1279 年、踊り念仏を始める。

◎『一遍上人語録』（岩波文庫）
●１．
熊野参籠（さんろう）のとき、御示現に云く、
「心品（しんぼん）のさばくりあるべからず。この心はよき時もあしき時も、まよいなるゆえに出離（しゅつり）の要（よう）とはならず。南無阿弥陀仏が往生するなり」と云云。われこの時より自力の意楽（いぎょう：思い・願い、心の工夫）をばすてたり。（165 頁）

●２．
熊野権現の、「信不信をいわず、有罪無罪を論ぜず、南無阿弥陀仏が往生するぞ」と示現（じげん）し給いし時より、法師（ほっし：自称）は領解して、自力の我執を打ち捨てたりと。これは常の仰せなり。（83 頁）

●３．
身のよしあしをえらばず、心のすみすまざるを論ぜず、唯南無阿弥陀仏と唱えて、取捨の分別なければ、…往生を遂るなり。このゆえにいかなる心は相応すべし、いかなる心は相応すべからずとおもう心は、不思議の本願に相違する故に、露ばかりも心品のさばくりせん程は、他力に帰したりとおもうべからずと云。（206 頁）

●４．
（人から、念仏行者の「用心」のことを示してほしいと言われて）
南無阿弥陀仏ともうす外、さらに用心もなく、この外にまた示すべき安心もなし。諸々の知者たちの様々に立ておかるる法要どもの侍るも、みな諸惑に対したる仮初（かりそめ）の要文（ようもん）なり。されば、念仏の行者は、かようの事をも打ち捨てて念仏すべし。
　むかし、空也上人へ、ある人、「念仏はいかが申すべきや」と問いければ、「捨ててこそ」とばかりにて、なにとも仰せられずと、～に載せられたり。これ誠に金言なり。

念仏の行者は、智恵をも愚痴をも捨て、善悪の境界をも捨て、地獄をおそるる心をも捨て、極楽を願う心をも捨て、また諸宗の悟りをも捨て、一切の事を捨てて申す念仏こそ、弥陀超世の本願にもっともかない候え。
かように打ちあげ打ちあげ唱うれば、仏もなく我もなく、ましてこの内にとかくの道理もなし。(34 頁)

●５．
（ある人が臨終ちかくなりて、一遍上人に）
「とにかくに　迷うこころのしるべせよ　いかに唱えて棄てぬ誓いぞ」と詠んで尋ねたのに対して、
とにかくに　迷う心をしるべにて　南無阿弥陀仏と申すばかりぞ（68 頁）

●６．
三心というは身命を捨て、念仏申すより外に別の子細なし。
其**身命を捨たる姿は、南無阿弥陀仏是なり**。（151 頁）
（『一遍上人語録』：「其**身心を棄たる姿は、南無阿弥陀仏是なり**。」73 頁）

●７．
智慧というは、所詮、自力我執の情量を捨て失う意（こころ）**なり**。…
我よく意得（こころえ）、我よく念仏申して往生せんと思うは、自力我執が失なえざるなり。おそらくは、かくのごとき人は往生すべからず。念不念・作意不作意、総じてわが分にいろわず［関係せず］、ただ一念、仏に成るを一向専念というなり。（82 頁）

●８．
自力の時、我執憍慢（きょうまん）はおこるなり。そのゆえは、わがよく意得（こころえ）、わがよく行じて生死を離るべしと思う故に、智恵もすすみ行もすすめば、我ほどの智者、我ほどの行者はあるまじと思いて、身をあげ人をくだすなり。他力称名に帰しぬれば、憍慢なし、卑下なし。そのゆえは、身心を放下して、無我無人の法に帰しぬれば、自他彼此の人我なし。（86 頁）

●９．
異義のまちまちなる事は、我執の前の事なり。南無阿弥陀仏の名号には義なし。…　往生はまったく義によらず、名号によるなり。（121 頁）

●１０．
凡情をもって識量する法は、総じて皆まことなし。…　名号ばかりを真実という。（157 頁）

●１１．
念仏の下地を造る事なかれ。総じて、行ずる風情も往生せず、声の風情も往生せず、身の振る舞いも往生せず、心の持ちようも往生せず。**南無阿弥陀仏が往生するなり。全く風情無きなり。**（196 頁）

●１２．
決定（けつじょう）往生の信たらずとて、人ごとに歎くは、いわれなき事なり。
凡夫の心には決定なし。決定は名号なり。しかれば決定往生の信たらずとも、口にまかせて称せば往生すべし。
　この故に往生は心によらず、名号によりて往生するなり。「決定の信をたてて往生すべし」と言わば、なお心品にかえるなり。わが心を打ち捨てて、一向に名号によりて往生すとこころ得れば、おのずからまた決定の心はおこるなり。（88 頁）

●１３．
名号に心をいるるとも、心に名号をいるるべからず。（89 頁）

●１４．
皆人の、**南無阿弥陀仏をこころえて、往生すべきように思えり**。はなはだいわれなき事なり。六識凡情をもて思量すべき法にはあらず。但し**領解すというは、領解すべき法にはあらずとこころ得るなり**。（97 頁）

●１５．
願往生のこころは、名号に帰するまでの初発の心なり。…　うちまかせて人の思えるは［人が勝手に思っていがちなのは］、わがよく願いの志が切になれば往生すべしと思えり。［168 頁］

●１６．
所詮、罪功徳の沙汰をせずして、なまさかしき智恵を打ち捨て、身命をおします、ひとえに称名するより外は、余の沙汰はあるべからず。身命をすつるというは、南無阿弥陀仏が自性自然に身命を捨て、三界を離る姿なり。（174 頁）

●１７．
おおよそ仏法は、当体の一念の外には談ぜざるなり。…
当体一念の外に、所期（しょご：期待するところ）なきを無後心という。所詮は、待つ心のまちまちなるを失うべきなり。（101 頁）

●１８．
ただ南無阿弥陀仏がすなわち生死を離れたるものを、これを唱えながら往生せばやと思い居たるは、飯を食い食い、ひだるさ［空腹］やむる薬やあると思えるがごとし、と。これ常の御詞なり。（114 頁）

●１９．
仏法には、身命を捨てずして証利を得る事なし。仏法にはあたいなし。身命を捨つるがこれあたいなり。（115 頁）

●２０．
ただ今の念仏の外に、臨終の念仏なし。臨終即平生なり。…　ただ今、念仏申されぬ者が、臨終にはえ申さぬなり［申すことができない］。遠く臨終の沙汰をせずして、よくよく恒に念仏申すべきなり。（117 頁）

●２１．
ある人問うていわく、「諸行［念仏以外の行］は往生すべきや、いなや。また法華と名号と、いずれか勝れて候」と云々。
　上人答えて云く、「諸行も往生せばせよ、せずばせず。また名号は法華に劣らば劣れ、勝らば勝れ。なまさかしからで、物いろい［いろいろと比較・詮索すること］を停止して、一向に念仏申すものを、善導は「人中の上々人」とほめたまえり。…　念仏の外には物も知らぬ法滅百歳の機になりて、一向に念仏申すべし。これ無道心の尋ねなり。」（120 頁）

●２２．
深心は「自身現是罪悪生死凡夫」と釈して、煩悩具足の身と思いしりて、本願に帰するを体とす。（150 頁）

●２３．
「自身現是罪悪生死凡夫、曠劫已来常没常流転、無有出離之縁」と信じて、他力に帰するとき、種々の生死は留まるなり。（187 頁）

●２４．
名号に帰せざるより外は、いかでか我と本分本家に帰るべき。（178 頁）

●２５．
みな人のことありがおに思いなす　こころは奥もなかりけるもの（55 頁）

●２６．
春すぎ秋来たれども、すすみ難きは出離の要道。花をおしみ月を眺めても、起こりやすきは輪廻の妄念なり。…　いそぎはげまずしては、いずれの生をか期（ご）すべき。他力の称名は不可思議の一行なり。（41 頁）